

# サヤエンドウじいさんとやまんば

吉川 友 二

酪農を始めるために足寄町に引っ越してきたのは、十年前の二〇〇〇年の六月一日だった。今年は毎日が十周年記念日だ、などと冗談を言っていたが、怪我や病気の多い年であった。生まれてから大した怪我や病気をしたことがなかったので、確かに、特別な年であった。

まずは新年早々の二日、二歳になる子供を抱っこしながら階段を下りているときに、足を踏み外して肋骨を折った。レントゲンを撮ると、肺が少し破けているということとで、一晚入院をした。

そして同じ一月、胃の張りが何日か続き、病院へ行った。検査のために結局九日間も入院することになってしまった。原因は分からずじまいだったが、入院中の絶食のお陰か、幸いなことに自然に治った。

そして最後は年の暮れの十二月、陰嚢水腫の手術で三日間の入院をした。そしてそれから十日間経って、恐る恐る自分の睾丸を触ると、硬く腫れていた。手術のやり直しと言われたらどうしようかとドキドキしながら病院へ行くと、急性副睾丸炎と言われる。お薬だけでいいと言われてホッとすする。尿道カテーテルで出来た傷からばい菌が入ったらしい。カテーテルを取ってから四、五日間

は、おしっこをする度にしみるように痛くて、おしっこをするのが恐怖だった。普通におしっこが出来るだけで幸せですね。

帯広の病院から帰ってくると、なんだか仕事をやる気が起きなかった。それでもなんとか夜の搾乳を終えると、寒い。夕食を済ませても、あまりにも寒い。なにを勘違いしたか、お風呂に入れば温まるのではないかと、お風呂に入る。お風呂の中で、バタバタと身体を動かしてみても一向に寒気が治まらない。お風呂から出ると心臓がドキドキと苦しい。布団の中に入っても寒い。やつと発熱だと気がついて、熱を測ると三十九度二分もある。脈拍は百五十くらいだろうか。時々、心臓がひっくり返ったような感じがして、もしかしたら心臓発作で死ぬんじゃないか、などと考える。

ガタガタ震えながら考えた。どうせ死ぬのなら、死ぬまでの短い間、イライラしたり、不平不満を並べていたら、もつたいたない。今、布団の中で出来ることは考えることだけなのだから、死ぬまでの間は最高のことを考えていたい。

「沖縄の青い海と青い空が広がっている。珊瑚礁の島から島へと長い一本の橋が架かっている。真っ青な海と空に吸い込まれるように、小学校二年生の息子と、橋の上を自転車で走っている。」

一時間ほど経っただろうか、気がつくとも脈拍は下がっていた。寒気は治まらなかつたが、いつの間にか寝ていた。朝、目が覚めると、寒気がしなくなっている。ありがたいもんだ、人間の身体はほつといてもちゃんと元に戻ってくれる。ふと「自分のこの人生の課題はイライラしないことだ」と思い始めたのは何時のことだったろうと布団の中で考える。たまたま近くにあった前号の『噴煙』をチラッとみると、「四十五歳になった、人生の後半の新しい課題に取り組む時期に来ているのではないかと書いている。そのときにはまだ「イライラしないことだ」とは思っていないなかつた。お昼過ぎ頃に、この十一月に農業大学校でお話をした後だ、と思い出す。

うちから車で二十分ほどの距離に農業大学校がある。そこで五年ほど前から、就農を目指す人たちに、私の体験談を話させてもらっている。バブル真っ只中の一九九一年に大学を卒業し、自給自足の有機農業を目指したところ。夏は北海道の農場で働き、冬は内地で出稼ぎをした四年間。それからニュージーランドへ渡り、牧場で働きながら酪農を学んだ四年間。日本へ帰ってからの足寄への移住、牧場作り、そして家族ができた十年間。自分の中の何者かに突き動かされるように生きてきた。振り返ってみると、自分を超えた何者かに守られ、導かれている

ようだった。

最後の時間もないというときに、斉藤一人さんの本で読んだ「神様の時間調整」の話を紹介した。その話というのは、例えば、車で出かけたときに、途中で財布を忘れた事に気がつく。そのときに、急いで取りに帰ってはいけないよ、ゆっくりと取りに帰りなさい。イライラしたらだめだよ。車の事故なんて、〇・一秒の差で大事故になったり、何もなかつたりする。財布を忘れたことは、神様が事故が起きないように守ってくれているんだよ。神様の時間調整なんだよ、というお話だ。

講義の時間が終わって、まだ搾乳の仕事までに少し時間の余裕があつた。ダンプをゆっくり運転しながら、なんでわざわざこの話をしたのかな、と考えた。そういえば今まで事故を起こした時は、必ずイライラしていた時ではなかつただろうか。イライラしないというのがこの人生での課題ではないか、と思つた。

この新規就農者に一番言いたいことは、お互いに、事故に気をつけて、元気で楽しく農業をやるうね、ということだ。そして今回の講義で初めて、娘の死を少し語る事が出来た。二〇〇四年に、私がタイヤシヨベルで雪中に起こした事故で、二歳になったばかりの長女を亡くしている。事故に気をつけてもらうように、娘の事故の話をしようにと思って毎回講義に臨むが、今まで話せないでいた。ニュージーランドでの酪農の第一回目の授業

は安全教育で、農薬の誤飲で子供を亡くされたお父さんがお話をしてくれた。

その除雪の時も、午後から行かねばならないお医者さんに間に合うように急いでいた。里の亡くなる前の年には、ぎっくり腰になっていて。その時は、なかなか天候がすぐれない日が続いて、乾草をつくるための草が刈れずに、焦っていた。階段で滑って転んで肋骨を折った時も、イライラしていた。今では、農作業機械を運転している時に、周りに気をつける以上に自分の心の状態に気をつけるようにしている。

イライラしないことの課題といえば、まずは四人の子供たち。上は小学二年生、下は三歳と、四人の子供がいる。一人として親の思い通りにはならない。

人間が意識して作った人工でない物を自然というとする、子供たちは、自然から意識を獲得していく過程にいる自然と言っていいだろう。自分の身体も自然。無意識も自然。人間の意識は、自然の中の小さな点である。でも、意識によって自然を見ているので、意識の世界の方が無限大であると思っている。思い通りにならない子供たちを代表として、自然とは人間の思い通りにならないものすべてと言ってもいいかもしれない。農業大学校では、人生の目的は新規就農ではなくて、幸せになることだから、上手くいかなくても「思い通りにならないことが、思い通り」と思ったらいよいよ毎年言っている。

自然といえば、大学を卒業し、自給自足で生きて行くとしたときには、テント生活でもいい、自然の中で生きたい。自然とはなんなのか、それが分かったら死んでもいいなどと思っていた。こんな当時の思いつめた思いもすっかり忘れてしまっていて、この文章を書いていて思い出した。

夜寝る前に、子供に本を読んでいる。一人だけ読んでやって済まされることはない。どうしても眠くて、今日は読まないと言って寝てしまうと、四人は寢床で暴れまわって遊びだし、四人の勢いは、止まることを知らなくなる。本を読みながらこつくりこつくりとすると、子供がしつかり読めと大声をあげる。

そんな絵本の中で、不思議と眠くならない本がある。『世界の民話』実業之日本社だ。初版は一九六四年の十二月、四十六年前の自分の生まれた年の本だ。その中でも『サヤエンドウじいさん』のお話には、驚いた。「ほらをふく、くせがあつて、いつも、でたらめばかり、いつていました。」とイエジーじいさんが主人公である。

イエジーじいさんを助けるために突然現れた、超越的な力を持つサヤエンドウじいさんは、「ほらをふいたり、うそをつくくと、とんでもないさいなんが。ふりかかってくるからな。」と何度も警告をする。けれども、イエジーじいさんは、そんなことはお構い無しに、うそやほらを

くりかえす。今度こそ、イエジーじいさんは破滅だろうとドキドキしていると、サヤエンドウじいさんが現れて助けてくれる。これを五・六回繰り返すのだ。そして最後まで、イエジーじいさんを守ってくれる。

子供のときに読んだ、オオカミと少年では、オオカミが出たとうそを言った少年が、三度目には、オオカミに食べられてしまう。子供心に恐ろしかった。でも、西洋は奥が深い。「サヤエンドウじいさん」はポーランドの民話だが、こんな人たちとなら、友達になりたい。昔話は、人の善悪の判断を超えた予想も出来ない話の展開が面白い。子供たちも自然も善悪を超えている。

小学校二年生の長男が、宿題だと言つて、「笠こ地蔵」を声に出して読んでいた。自分が小学生の時の教科書にも「笠地蔵」があつた。日本人はよほどこのお話が好きなんですね。

朝晩の心地の良い緊張感がある搾乳が終わつて、搾乳施設を掃き掃除しているときには、ボケーっと、考えごとをしている。就農してそれほどたないある日、ふと「笠地蔵」のお話は、日本の自然の豊かさの話ではないか、という考えが浮かんできて、ハツとした。お地蔵様とは、日本の自然のことではないか。自分が、食うや食わずでも、笠をお地蔵さんに掛けてあげる、自分の手ぬぐいまでも掛けてあげる。豊かな心を持つて生きていければ、自然はきつと我々を生かしてくれるという、豊かな

日本の自然への日本人の信頼のお話ではないか。ヨーロッパの山岳地帯で放牧酪農を経験してきた人が、日本の自然は恵まれていて、そこで放牧酪農をするのは野天の金鉱掘りのようだと言っていた。戦後に開拓をされた足寄の高台の地でも、牛たちに生かされて、私たち家族が豊かに暮らしていける。

話は前後するが、足寄にやってきてから、近くの農家の方に紹介していた、だいた女性と翌年に結婚をした。その結婚式の時に、伯母から、「家族が幸せなら、農業は必ず成功する」と言われた。子供の頃から大好きな伯母は、生まれてからずっと農業に携わっている。その時は「自分が頑張つて、農業を成功させて、家族を幸せにするのだ」と正反対のことを考えていたので、言われてすぐには何を言われたのか理解できなかった。数日して落ち着いてから、その言葉を思い出して、ああそういうことなのか、と気がついた。もし、そのまま伯母の言葉を忘れてしまっていたら、その後の私の農業も人生も、今とは変わっていただろう。

小学生の時、毎晩、やまんばに追いかけられる夢を見た。寝るのが怖くなり、夜寝る前にシクシクと泣いていた。それは何日続いたのだろうか。ちょうど当時、テレビで「エースをねらえ」というスポーツ根性もののテレビアニメをやっていた。布団の中で、その主題歌の歌詞

を小さく歌いながら、自分を励ましていた。「コートでは、誰も、誰も、一人きり……」そうか、起きている時には優しい両親も夢の中では助けられない。夢の中では自分一人きりで生きていかなければならないのだ。そんな覚悟が出来た。そうしたら、いつの間にか、やまんなに追いかけられる夢を見なくなった。

眠りの世界に入っていくのは、ハードルが高いのだろうか。いま五歳になる次男も、部屋を暗くすると自分の腕にしがみついてくる。なかなか眠れないように、小さな声でムニャムニャと何かをいつまでも言っている。

夢の中の体験によって、甘えん坊の自分が育てられ、成長した。そんなこともあって、小さい時から、夢の体験も現実の体験も変わりが無いんだな、と思ってきた。

大人になって夢について書かれた本を読んでいると、夢は、それがどんなに悪い夢でも、現実を生きている私たちへの、自分の深いところからの応援歌なのだ、と書かれていた。自分自身の深い場所が、現実の自分を応援するために夢を作ってくれているとしたら、この現実はどうなにも悪い現実であったとしても、我々を超えた何者かが我々の生長を応援するために作ってくれていると言ってもいいかもしれない。今・ここを信じて、しっかりと今を味わいたい。

娘を亡くす前に何度か同じ夢を見た。娘がのっぺらぼ

うの男達に、連れ去られてしまう夢だ。自分は悲鳴を上げて目を覚ますのだ。事故から四・五年経ってから、その夢を思い出して、もつともつと夢を信じてあげていれば、事前に事故にも注意できたかもしれないなど思った。また、トラクターの事故九死に一生を得た経験を持つ人が、順調に上手くいっている時は気を付けたらいいよ、と会うたびに言ってくれた。自分に起こる事故のことだと思っていて、娘に起こるとは考えもしなかった。妻を紹介してくれた方は「俺は正夢を見たことがないんだが、吉川と千枝ちゃんと里が手をつないで家の前の道を歩いている夢を見たんだ」と不思議そうに言っていた。そのときは離婚するのかと思った。夢がいつもわけが分からないのは、理屈ではなくて、体験を求めているからだろうか。

自然が分かるとは、意識で理解することだけではなく、今を生きる在りかたを深めること、つまり自分自身の在りかたを、自然のある在りかたへ深めていくことだろう。三年連続で『噴煙』に書かせて頂く機会を頂いたおかげで、古くて新しい出発点にたどり着くことが出来た。